

# 付度、改竄、修正主義

## ——アーレントとパレスチナ問題2

小 森 謙 一 郎

批判意識は、その標的たる現実の社会や世界の一部分であり、また当の意識が住まう言葉という身体の一部なのであって、いずれにせよ断じてそこから逃れるものではない。

(エドワード・W・サイード『世界・テクスト・批評家』)

### 一 再び問う

パレスチナ問題について、アーレントはどのように考えていたのか？

エリザベス・ヤング・ブルーエル『ハンナ・アーレント——世界への愛のために』第二版（二〇〇四年）には、次のように書かれている。

一九六七年の「第三次」中東戦争の間、ハンナ・アーレントはイスラエルの勝利を情熱的に誇りとした。普段はイスラエルの政策に批判的だったのに、友人の一人が述べるところによれば「戦争花嫁のように」振る舞った。軍事的関与について、アーレントは攻撃的なものと防衛的なものとを截然と区別し、一九五六年の「第二次中東」戦争は愚かしいものだったが、一九六七年の戦争は理に適うものだと考えた。一九六七年一〇月〔sic〕の六日間戦争を振り返りながら、彼女はメアリー・マッカーシーにこう書いている。「イスラエルに真の破局が訪れれば、他のほとんど何よりも、私の心を深く揺さぶるでしょう」。一九七三年、エジプトとシリアが贖いの日ヨム・キפורにイスラエルの領土に侵攻したとき、破局は差し迫っているように見えた。そして今回はイスラエルが破壊されるかもしれない、とアーレントは恐れた。（第四次中東）戦争は一〇月六日に始まった。それはアーレントがフランス・テレヴィジョンのためにロジェ・エレラとの一週間にわたるインタヴューを始めた日だった〔sic〕。インタヴューの書き起こしは、彼女の心を占めていた思いを反映している。「ユダヤ人はイスラエルでは一つになっています」と彼女は言った。そしてさらに進んで、ユダヤ教は国民宗教です、と何の批判もなく説明した。ロジェ・エレラはスファルデイ系ユダヤ人で、パリのカルマン・レヴィ出版社の叢書「ディアスポラ」の編者だった。二人は一緒にコロンビア大学のロースクールで開かれた会議に行ったが、ここではイスラエルの大義を援助するためのさまざまな提案が検討された。アーレントは一九六七年にしたのと同じように、全国ユダヤ運動に寄付をした。また戦争がテル・アヴィヴに在る親戚の安全を脅かした場合には、すばやく財政援助ができるよう準備を整えた。一〇月の第二週に戦闘の形勢が変わると、彼女は「『精神の生活』第二部」「意思」の草稿に再び着手しようとした。「私は仕事に戻るのにちょっと支障があるのですが、それはもちろん主として予期しえなかった

今回の「歴史」の勃発のせいです」と彼女はメアリー・マッカーシーに書いた。<sup>①</sup>

ヤングブルーエルの伝記におけるこの一節は、パレスチナ問題に関するアーレントの考えを検討するにあたって、依然として避けることができない。

第一版（一九八二年の第一刷）との異同は、二点ある。第一に、第四次中東戦争の開始日が「一〇月九日」から訂正されたこと。第二に、「アーレントは一九六七年にしたのと同じように全国ユダヤ運動に寄付をした」という一文において、寄付先の組織が「ユダヤ防衛同盟」から訂正されたこと。後者はエドワード・サイードの一九八五年の論文「差異のイデオロギー」で指摘された内容を踏まえている。前者もその際に気づいてあわせて訂正したものかもしれない。

だが、第一の訂正の結果、「ロジェ・エレラとの一週間にわたるインタヴューを始めた日」が変わってしまった。ヤングブルーエルはこの点については何も述べていない。のみならず、最初に「sic」とした第三次中東戦争の時期に関しては、訂正されることなく第一版からずっと間違っている。

こうした状況からすると、もしサイードの論文がなければ、訂正された二点もそのままだった可能性が考えられる。ここから容易に予想されるのは、さらに詳しく調べてみるなら、もっと多くの誤りが見つかるかもしれない、という事態である。そして、ヤングブルーエルの伝記が今日なお権威ある文献として流通している以上、そのような検証作業に着手してみる意義は十分あることになるだろう。実際、この一節は一文一文が精査に価する。あらかじめ述べておくなら、もろもろの誤りは一著者の単なる偶然的なミスに起因するのではなく、現在に至るまでイスラエルとアメリカを——したがって多かれ少なかれ「世界」そのものを——支配しているイデオロギーに基づくのである。そ

こには根本的な問題があり、極東の全体主義も「グローバル世界化」に分かち難く結びついている。私たちがパレスチナ問題と向き合う理由——あるいはむしろ向き合わなければならない責任——もそこにある。

しかしながら、検証できる範囲には限りがある。たとえば「友人の一人が述べるところによれば」という箇所に関して、当の「友人」が誰だったのかを突き止めるのは至難の業だし、彼ないし彼女がいつ・どこで・なぜそう述べたのかを確定することは不可能に近い。というより、そのような「友人」がそもそも本当に存在したのか、仮に存在したとしてアーレントにとって実際に「友人」と呼べるような人物だったのか、確認する術もない。同様に、ヤングブルーエルが出典をあげていなかったり、具体的な証拠なしに記述している箇所については、検証できないことも多い。

それゆえ、確実に検証できる箇所から作業を始めよう。それはアーレント自身の言葉が引用されている箇所のほかならず、ここでは全部で三つある。ヤングブルーエルは三箇所すべてに注を付し、それぞれ出典を示している。したがって出典にあたりさえすれば、アーレントがどのようなコンテキストで当の言葉を発していたのかを確認できるはずであり、またその内容をヤングブルーエルが語る地の文と照らし合わせてみれば、事柄の多くが検証できるはずである。特別な方法は不要であり、三つの注を順に確認していくだけで。

にもかかわらず、作業は最初からつまづくことを避けられない。

## 二 付度の起源

というのも、最初の引用「イスラエルに真の破局が訪れば、他のほとんど何よりも、私の心を深く揺さぶるでしょう」という箇所に付された注には、「アーレントからマッカーシー宛、一九六八年二月二一日」とあるもの<sup>(3)</sup>、示

された手紙に当の言葉はないからである。つまり、出典自体にまず誤りがあるのだ（こうした杜撰さにもはやいちいち驚いたり呆れたりしないようにしよう）。

実際には、当の言葉は一九六九年一〇月一七日付の手紙にある（時間差は小さくない）。さらに文脈に沿って読むなら、アーレントがこの手紙を「六日間戦争を振り返りながら」書いたわけではないことが明らかになる。直前と直後の文章を含めて確認しよう。

ユダヤ人はこう考えているのです。帝国や政府や国家は起こっては消える、だがユダヤ民族は残る、と。この情熱には何か壮大なもの、そして何か卑しいものがあります。私自身はこれを共有してはいないと思っています。ですが、そんな私でもわかっていることですが、イスラエルに真の破局が訪れば、他のほとんど何よりも、私の心を深く揺さぶるでしょう。ナタリーの同胞意識は素朴かつ幼稚なもので、その話しぶりは反省のないユダヤ人そのままです。けれども、ほとんど過剰なまでに自分自身のことを思案しながら、ユダヤ人としての自分についてには全然検討せずにいるというのは、いかにも特徴的です。<sup>①</sup>

「ナタリー」とは、ナタリー・サロート、ロシア出身の作家である。ユダヤ人の両親のもとに生まれたものの、離婚に伴い幼少時にフランスに移住、戦後いわゆるヌーヴォー・ロマンの旗手の一人となった。<sup>②</sup> 当時パリに住んでいたマッカーシーは、この作家としばしば会っていたらしい。一ヶ月前、アーレントに宛てた一九六九年九月二三日付の手紙には、こう書かれている。「イスラエルについての彼女の見方は普通ではありません。彼女はイスラエルを自分のよく知っているソ連と比べつづけ、そのコンテクストでは当然イスラエルが優れていることになるのです。〔…〕

こんなに興奮し、こんなに彼女らしくない彼女は、見たことがありません（…）。まるで愛する人が危篤状態にあるかのように、イスラエルの生き残り、に取り憑かれています<sup>(6)</sup>。

一九六七年六月の戦争で大勝利を収めたイスラエルは、エジプト、シリア、ヨルダンから、それぞれシナイ半島とガザ地区、ゴラン高原、ヨルダン川西岸地区を奪った。アラブ諸国はもろんこれに反発、和平交渉はせず、戦前と同様イスラエルを承認することも拒否した。同年一月に全会一致で承認された国連安保理決議二四二号は、イスラエルによる占領を無効とし、各国の主権や領土保全の尊重を明記している。しかし、イスラエルもアラブ諸国もこれを受け入れず、対立は続くことになった。パレスチナ側でも、ヤセル・アラファト率いるファタハがPLOに加入、本格的な抵抗運動がはじまっていた。こうして六〇年代末には、国家の滅亡とホロコーストの再来に対する不安とともに、「イスラエルの生き残り」を主張する風潮が——第三次中東戦争で勝利したからこそ余計に——強まることになったのである（付け加えるなら、そこから出てきた最も過激なグループが「ユダヤ防衛同盟」だったことになるだろう）。

しかしこうした心理、つまりマッカーシーの手紙によれば、「まるで愛する人が危篤状態にあるかのように」訴えるサロートの「興奮」を、当時のアーレントは必ずしも共有していなかった。むしろ「ナタリーの同胞意識」を指摘し、彼女を「反省のないユダヤ人」と呼ぶことで、アーレントはナシヨナリズムに対する批判精神を示しているように思われる。それは「ユダヤ民族は残る」という「情熱」に「何か卑しいもの」を見てとる眼差しと通底しており、一九六九年一〇月一七日の手紙の基調もこの点にあると言えるだろう。こうした連関は、マッカーシーが出した手紙と当時の状況を踏まえることで、はじめて理解できるのである。

だからこそ、コンテクストを無視して都合のよい一文だけを切り取って引用しているヤングブルーエルの記述を、

そのまま受け入れるわけにはいかない。出典が間違っているのみならず、アーレントが「六日間戦争を振り返りながら」手紙を書いたというのは言い過ぎである。戦争後の状況が踏まえられているのは事実だとしても、戦争そのものを顧みているとは言い難い。また「イスラエルに真の破局が訪れれば……」というアーレントの言葉も、彼女の批判精神をあわせて考察してこそ意義があるのであり、こうした両義性<sup>アムビグイティ</sup>についてはあらためて考え直す必要があるだろう。にもかかわらず、「普段はイスラエルの政策に批判的だった」アーレントの姿勢が、第三次中東戦争以降まったく失われてしまったかのように伝えているこの一節は、学術的には客観性に欠けており、政治的には偏りがあると言わざるをえない。

そして同じ偏向が、次なる一文をも導いているように思われる。「一九七三年、エジプトとシリアが贖いの日<sup>ヨム・キプー</sup>にイスラエルの領土に侵攻した」。この一文に関してサイードが二度にわたって指摘した「誤り」については、もはや振り返えらない<sup>(7)</sup>。ここで確認しておくべきは、偏向はただ個人<sup>(7)</sup>のうちにだけあるのではないということだ。事実、別のところ——たとえば『イスラム報道』(一九八一年)——でサイードが論じているように、イスラエルを中東唯一の民主主義国家とみなす一方、侵略行為はおしなべてイスラム世界に結びつけるという傾向は、とりわけ合衆国のメディアにおいて顕著だった<sup>(8)</sup>。著者ヤング・ブルーエルのみならず、伝記の読者たちも多かれ少なかれ同じ図式を——あるいはむしろ同じイデオロギーを——共有していたからこそ、今まで誰もこの一節に疑念を抱かなかったのかもしれない(この点はもちろん合衆国に限った話ではない)。

だが、忖度はそうした偏向から生じる。実際、次の一文——「今回はイスラエルが破壊されるかもしれないとアーレントは恐れた」——の客観的な証拠は、一体どこにあるのか? 「第四次中東戦争が勃発したとき」破局は差し迫っているように見えた」というのは、もっぱら親イスラエルの人々を念頭に置いているのでなければ、一体誰にとつ

て真実味があるのか？ ナタリー・サロートのような人物がそうした恐怖や不安を抱いたのなら理解できるとしても、この作家の心理を「素朴かつ幼稚」と形容するアーレントが、なぜ同じ懸念を抱かなければならないのか？ そして「二〇月六日に」攻撃を受けたのは占領地域であって、国際社会の理解からすれば決して「イスラエルの領土」ではなかったという認識を、アーレントは本当に持っているいなかったのだろうか？

### 三 改竄と国民

こうして伝記における二つ目の引用に先立つ地の文に対しても、疑問符を付けざるをえなくなる。「インタヴューの書き起こしは、彼女の心を占めていた思いを反映している」とヤング・ブルーエルは言う。だが、ここまで見てきたように、当の「思い」はすでに脚色されており、また「ロジェ・エレラとの一週間にわたるインタヴューを始めた日」も、ひそかに変えられてしまっている（こちらは第一版第一刷の記述通り「二〇月九日」だったはずである）。これらの点を確認した上で、二つ目の引用を試みよう。

「ユダヤ人はイスラエルでは一つになっています」と彼女（アーレント）は言った。

この箇所が付された注を確認すると、まず「インタヴューの抜粋は一九七八年一〇月二六日発行の『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』一八頁に掲載された」とある。だが、そこに掲載されているのは、正確には「抜粋」ではない。雑誌では「インタヴューのあいだになされたコメント」とされており、実際に放映されたインタヴューの内容とも異なっている。<sup>10</sup>次に「書き起こしの全文はフランス・テレビジョンの所有」とある。だが、書き起こしは



一九九九年に（つまり伝記の第二版より前に）『ハンナ・アーレント・ニューズレター』第二号で（つまりヤング・ブルーエルや専門的研究者たちも知っていたはずの媒体で）公表されている。以来、出典の検証は可能になっており、前後の文脈も含めて再び確認すると次のようになる。

エレーラ 「…」イスラエルの存在は、世界に生きているユダヤ人たちの政治的・心理的コンテクストを、どのような仕方を変えたのでしょうか？

アーレント あらゆることを変えたと思います。今日のユダヤ人はイスラエルの背後で実際に一つにされています。自分たちには国家がある、と彼らは感じているのです。アイルランド人、イギリス人、フランス人などと同じように、政治的代表者がいるということです。郷土ホームランドのみならず、国民ネーション・ステート国家があるのです。そしてアラブ人に対する彼らの全体的態度は、もちろんかなりの程度、こうした一体感に基づいています。中欧出身のユダヤ人たちがほとんど本能的に作り上げた一体感です。そこには反省がありません。国家はともかく国民国家でなければならぬ、というわけです<sup>1)</sup>。

最初に指摘しておかなければならないのは、ヤング・ブルーエルによる改竄である。つまりアーレントは「イスラエルの背後で、*behind Israel*」と言っているのに、ヤング・ブルーエルは「イスラエルでは、*in Israel*」と書き換えているのである。前置詞ひとつの書き換えは、些細なことに見えるかもしれない。しかし、アーレントがイスラエルという「国家」の制度を説明しているのに対して、改竄はそれを「彼女の心を占めていた思い」に変えてしまう。より詳しく見るならば、「今日のユダヤ人はイスラエルの背後で、実際に一つにされています」*The Jewish people today*

are really united behind Israel」というアーレントの発言は、一九五〇年の帰還法以来、世界中のユダヤ人にイスラエルへ移住する権利を認めてきた国家体制を念頭に置いたものだろう。しかし、ヤング・ブルーエルはこれを「ユダヤ人はイスラエルでは、一つになっていきます The Jewish people are united in Israel」と改変することで、一九七三年の戦争勃発に接したアーレントの「同胞意識」にすり替えてしまっているのである。<sup>12)</sup>

もつとも、エレラの質問が「政治的心理的コンテクスト」を問題にしているだけに、ヤング・ブルーエルがちよつとした誤解をしたにすぎないと考えることもできるかもしれない。しかし、通常の読解力さえ持ち合わせているならば、今やユダヤ人にも「政治的代表者がいる」というのが「政治的コンテクスト」であり、「心理的コンテクスト」については「中欧出身のユダヤ人たちがほとんど本能的に作り上げた一体感」をアーレントが指摘していることは明らかだろう。のみならず、ここで「アラブ人に対する彼らの、全体的態度」という言い方がなされている点に注意しなければならぬ。つまり「自分たちには国家があると彼らは、感じている」のであって、しかも「そこには反省がありません」。そして後者のこの文言が、先ほど見たナタリー・サロートに関する評言と一致することは言うまでもない。かくして、あらためて問わなければならない。第四次中東戦争に際して、アーレントは本当に「イスラエルの大義」を信じていたのだろうか？ そのように思わせたいらしいヤング・ブルーエルの伝記に反して、インタヴューのつづきで彼女はこう述べている。

こうして今では、ディアスポラ 離散とイスラエルの関係全体が、あるいはかつてあったパレスチナが、変わってしまいました。イスラエルはもはやポーランドの負け犬たちの単なる避難所ではないからです。ポーランドでシオニストといえば、富裕なユダヤ人から金銭を得て貧乏なユダヤ人に与えようとする者のことでした。しかし今日のイス

ラエルは実際に、世界中のユダヤ人の代表機関です。このことを私たちが好むかどうかは別問題ですが……。だからといって、ディアスポラ散ユダヤ人がイスラエル政府とつねに同じ見解を抱かなければならないというわけではありません。問題なのは政府ではなく国家です。そして国家が存在する限り、これはもちろん私たちが代表するものとして世界の目に映るのです。<sup>(13)</sup>

言葉遣いに再び着目しよう。「今日のイスラエルは実際に世界中のユダヤ人の代表機関です」という一文は、「今日のユダヤ人はイスラエルの背後で、実際に一つにされています」という先述の一文と同義である。そしてポーランド出身のベン・グリオンによる独立宣言以後、「国家が存在する限り、これはもちろん私たちを代表するものとして世界の目に映るのです」。

だが、ここで「私たち」とは誰なのか？ 文脈からすれば、「自分たちには国家があると感じている」「彼ら」とは異なるはずだろう。だからこそ、ユダヤ人国家が現実存在するということを「私たちが好むかどうかは別問題」なのであり、「ネーション・ステート国民国家がある」という「一体感」は、あくまでも「彼ら」のものなのだ。そう考えるなら、「私たち」とは文字通り「私」ことアーレント自身を含む人々を指すことになる。つまりイスラエルには住んでいない「ディアスポラ離散ユダヤ人」としての「私たち」とはいえ「国家はともかく国民国家でなければならぬ」とは考えていない点で、必ずしも「同胞意識」は持たない「私たち」。そしてこの「私たち」は、「アラブ人に対する彼らの全体的態度」も共有していないはずであり、だからこそ戦争が勃発した直後であっても、「イスラエル政府とつねに同じ見解を抱かなければならないというわけではありません」と明言することができるのである。

したがって、改竄された引用文の直後にヤング・ブルーエルが間接話法で書いている次の一文も、より注意深い

眼差しをもって読まなければならないことになるだろう。

そしてさらに進んで、ユダヤ教は国民宗教です、と何の批判もなく〔アーレントは〕説明した。

*national religion* という強調は、ヤング・ブルーエル自身による。また「国民宗教」という訳語は、既存の邦訳をあえて踏襲している。伝記を導くイデオロギーの方向性を考えれば、邦訳者たちが *national* を「国民」とした背景は理解できる。だが、アーレントが本当にイスラエルの「国民宗教」としてユダヤ教を捉えていたわけではない、ということは、インタヴューに立ち返ればすぐにわかる。彼女は先祖伝来の宗教を「民族宗教」とみなしていたのであって、それ以上でもそれ以下でもない。仮にユダヤ教を「国民宗教」として説明していたのなら、二級市民として扱われてきたパレスチナ人の存在と信仰をアーレントもまた完全に無視していたことになるだろう。しかし、彼女が語っているのはあくまでも「民族」であって、「国民」ではないのだ。

アーレント あなた（エレーラ）が宗教と仰るとき、もちろんキリスト教のことが念頭にあるのだと思います  
が、これは信条であり信仰です。ユダヤ人の宗教は、まったくそうではありません。こちらは実際のところ、民族と宗教が一体となった民族宗教なのです。ご存知のように、例えばユダヤ人は洗礼を認めません。そのようなものはなかったかのように済ませています。ユダヤ法にしたがえば、ユダヤ人はユダヤ人であることを決してやめないのです。ユダヤ人の母から生まれた以上——父を探すことは禁じられています *la recherche de la paternité est interdite* ——ユダヤ人です。宗教なるものについて抱かれている観念とは、まったく異なってい

ます。それは宗教というより生活様式であって、キリスト教が宗教であるという意味においては、その固有性ないし特殊性を持っていないのです。<sup>(14)</sup>

ここでアーレントがユダヤ教について説明している内容は、ごく一般的なものに思われる。ただ、こうした説明を第四次中東戦争に結びつけるヤング＝ブルーエルの恣意的な記述には、あらためて注意する必要がある。とりたてて疑問のない事柄について「何の批判もなく」説明するのは当然だし、アーレントのこの発言を進行中の戦争に関連させるのはあまりにも強引だろう。ここにもイスラエル国家に対する付度があると言えるかもしれない。

ともあれ、「民族と宗教が一体となった民族宗教」に戻ろう。そしてこれがキリスト教との比較の上でなされた発言であることに注意しよう。実際のところ、「民族と宗教が一体となった」といつても、ユダヤ人の「民族と宗教」は一枚岩的ではない。少なくともスファラディーム、アシケナジーム、ミズラヒームという周知の区分がある。それぞれの「離散ユダヤ人」の歴史的経緯は異なっており、確定された唯一の「民族宗教」が不変不動のものとしてあるわけでもない。しかし、これをまさに国民と宗教が一体となった国民宗教にすることがユダヤ人国家としてのイスラエルの基本方針にほかならず、だからこそ建国以来「離散」とイスラエルの関係全体が変わってしまいました」とアーレントは述べているのである。にもかかわらず、ヤング＝ブルーエルの記述はイスラエル国家のそうした同化方針にアーレントを事後的に従わせ、彼女の思考を歪曲して伝えているのだ。

#### 四 政治神学的修正主義

こうした観点からすると、伝記のなかの次なる一文、すなわち「ロジエ・エレラはスファルディ系ユダヤ人で、

パリのカルマン・レヴィ出版社の叢書「ディアスポラ」の編者だった」という事実確認的陳述文が、まったく別の角度から意味を持ち始めることになる。

というのも、アーレントはまさにその叢書「ディアスポラ」から『全体主義の起源』第一部「反ユダヤ主義」のフランス語版を出しているからである。<sup>15</sup> 編集に携わったのはもちろんエレラで、彼は一九六六年に「エルサレムのアイヒマン」のフランス語訳が刊行されたとき、その内容に関して肯定的な書評を発表した。<sup>16</sup> これを機にアーレントと親交を結んだエレラは、『反ユダヤ主義について』を出版したのと同じ一九七三年に、単独インタビューを実現させたのである。

そこで、フランス語版『反ユダヤ主義について』を開いてみよう。すると、扉に「クルト・ブルーメンフェルト（一八八三—一九六三年）の思い出に」という献辞があることに気づく。ブルーメンフェルトは若き日のアーレントをシオニズムに導いた人物で、ドイツ・シオニスト連合（SWHD）の会長を務めていた。一九三三年、ナチス体制の確立を受けて、パレスチナに移住している。献辞は当初一九五五年刊行の『全体主義の起源』ドイツ語版に、彼の生誕七〇年を記念する形で組み込まれた（六二年の再版にも残されている）。しかし英語版には一貫して記載されておらず、アーレント自身は「忘れていた」と述べているものの、何か思うところもあったのかもしれない。いずれにせよ、刊行間際になってフランス語版にブルーメンフェルトの名を入れようと思った背景には、それなりの考えがあったはずだ。<sup>17</sup>

というのも、献辞はまさに「離散ユダヤ人」<sup>ディアスポラ</sup>の歴史的経験に関わっているからである。この点をもっとも簡潔に説明するのは十年前、アイヒマン論争が本格化するなか、ゲルシヨム・シヨーレムに対してアーレントが書いた手紙（一九六三年七月二四日付）の一節だろう。

ブルーメンフェルトを追悼する文章のなかで、ベン・グリオンはブルーメンフェルトがイスラエルで改名しなかつたことに遺憾の意を示しています。しかし、ブルーメンフェルトがそうしなかつたのは、若い頃にシオニストになつたのとまったく同じ信念からでした<sup>(18)</sup>

シヨールムは「ゲアハルト」に加え「ゲルシヨム」と名乗るようになった。若くしてパレスチナに移住したとき、ドイツ語式の名とともにヘブライ語式の名も用いることにしたのである。ベン・グリオンもパレスチナに移つた後、生来の「グリユーン」という姓を改めている。そこにはもちろん、自分たちの土地で、自分たちの言語で生活するという意識があつたにちがいない。

そしてブルーメンフェルトもまた前述のように「郷土<sup>ホム・ランド</sup>」に渡つた。しかし彼は姓名を変えず、ドイツ語の名前を保持した。その理由は「若い頃にシオニストになつたのとまったく同じ」と述べるアーレントは、別のところで次のように書いている。「彼「ブルーメンフェルト」はいつも言っていました、私がシオニストなのはゲーテのおかげだ。あるいはこうです、シオニズムはユダヤ人に対するドイツからの贈り物だ」<sup>(19)</sup>。

ドイツからの贈与によつてシオニストである以上、自分の名前においてドイツ語を保持することは、むしろシオニストであることの証明である。逆に、ヘブライ語名に変えてしまった瞬間から、自分がユダヤ人であることの根拠は失われてしまう。自分はいくまでもドイツ・ユダヤ人なのであり、「郷土<sup>ホム・ランド</sup>」で生活するからといって、必ずしもヘブライ語で名乗らなければならないわけではない。

ブルーメンフェルト自身がそう明言しているわけではないが、アーレントの解釈はおそらくこのようなものだったはずだろう。つまりひとつの土地にひとつの言語である必要はなく、そうした画一化こそが国民国家の癌なのだ。そ

れは多様性と複数性、この文脈で言うならば、<sup>ディアスポラ</sup>離散性を失わせる。ブルーメンフェルトはドイツ・ユダヤ人にとどまったのであり、新たなイスラエル人になろうとはしなかった。だからこそ、彼の名はアーレントにとって「<sup>ディアスポラ</sup>離散ユダヤ人」の象徴にほかならず、これを「ディアスポラ」という叢書の一冊に入れることは、まさに適切な言語行為だということになるだろう。しかも「スファールディ系ユダヤ人」の編者のもと——ブルーメンフェルトもアーレントもアシケナージ系である——、ドイツ語ではなくフランス語の本に献辞を加えたことで、<sup>ディアスポラ</sup>離散性はより強調される結果となった。

そのようなわけで、伝記のなかの次なる一文、すなわち「二人（アーレントとエレーラ）は一緒にコロンビア大学のロースクールで開かれた会議に行ったが、そこではイスラエルの大義を援助するためのさまざまな提案が検討された」という一文が問題になる。仮に書かれた通りの事実があったとしても（だがここにも何らかの誤りが含まれている可能性はある）、彼らが「イスラエルの大義」に賛成だったという証明にはならない。ヤングブルーエルがそう信じさせようとしているように、両者が<sup>ディアスポラ</sup>離散性を「一緒に」放棄し、イスラエルのために「一つになって」いたと想定することは、コンテキストからして無理があるだろう。そもそもどのような会議であれ、検討されている事案に違和感を持つことは一般的にありうるし、参加する動機や理由もそれぞれ異なったものでありうる。にもかかわらず、ここでは「会議に行った」という行為自体がすでに親イスラエル的であるかのように、<sup>ディアスポラ</sup>それらしく見える仕方、<sup>ディアスポラ</sup>脚色されているのである。

単なる事実の意味をこのようにひそかに一義的に規定する記述の仕方は、強固なイデオロギー的言説、近年ではとくに歴史修正主義的言説を想起させる。ただ、ここではホロコーストや南京大虐殺、あるいはガス室や従軍慰安婦の存在が否定されているのではなく、パレスチナ人の存在とこれに対する民族浄化政策が<sup>ディアスポラ</sup>無視・看過されているのであ



る。<sup>(20)</sup>「イスラエルの大義」が自明であるかのように記述することで、「アラブ人に対する彼らの全体的態度」を批判的に捉えていたアレントの姿勢も——最初からなかったかのように——掻き消されてしまふ。

しかも、こうしたイスラエル⇨アメリカ的修正主義は、ドイツや日本のそれに名実ともに先立っている。それはテオドール・ヘルツル『ユダヤ人国家』以来の政治路線に立ち戻るべく、ウラジーミル・ジャボティンスキーによって提唱され、その後メナヘム・ベギンに受け継がれた修正主義、すなわちアラブ人を排除してヨルダン川両岸に純粋なユダヤ人国家を築こうとする政治的シオニズムと軌を一にしているのである。イスラエルはもともとユダヤ人の土地であり、あたかもパレスチナ人など存在しなかったかのように「彼ら」は考える。したがって、ヤング⇨ブルーエルの伝記——その第一版はベギン首相のもとレバノンに侵攻したイスラエル軍がベイルートのパレスチナ研究所を破壊したのと同じ一九八二年に出版され、翌年に全米ユダヤ図書賞歴史部門にノミネートされたのだった——を導くのは、イスラエル建国前後から今日に至るまで連綿と続いてきた狂信的かつ排他的なイデオロギー、つまり政治や歴史のみならず、宗教、経済、軍事、学問、メディアなど、すべてを貫く修正主義なのである。

いいかえれば、それは本来的な修正主義、あるいはむしろ政治神学的修正主義であり、この観点からすると、八〇年代のドイツや九〇年代の日本で顕著になった歴史修正主義は、時期的にも構造的にも二次的なものに見えてくる。とはいえ、その行き着く先がいずれも全体主義にほかならず、またその欲望が今日なお衰えないどころか、ますます強力になって回帰している現実は、どこにおいても変わらない。大文字の〈歴史〉は個々の「歴史」のなかで反復されるのであり、それゆえ身近なところ——企業、大学、官庁等々で——増殖する権力志向の迎合的な統率者<sup>リダー</sup>⇨指導者<sup>フューラー</sup>たちを日々の生活のなかで打倒することが、来たるべき民主主義の基礎になるだろう。

## 五 振り出しへ

かくして私たちは、伝記における三つ目の引用にたどり着く。検証してきた一節の最後の一文である。

「私は仕事に戻るのにちよつと支障があるのですが、それはもちろん主として予期しえなかった今回の「歴史」の勃発のせいです」と彼女（アーレント）はメアリー・マッカーシーに書いた。

注には「アーレントからマッカーシー宛、一九七三年一〇月一六日」とある。<sup>21</sup>三つ目の引用にしてはじめて出典に誤りがない。手紙は第四次中東戦争の勃発から十日後、インタビューを終えた翌週頭に書かれている。<sup>22</sup>だが、この事実を踏まえると、先立つ一文の矛盾点が浮かび上がる。「一〇月の第二週に戦闘の形勢が変わると、彼女は（『精神の生活』第二部）「意思」の草稿に再び着手しようとした」。

不意を突かれたイスラエルが反撃に転じたのは、たしかに「一〇月の第二週」だった。しかし、それはちょうどアーレントがインタビューを受けていた期間にはかならず、彼女はようやく一〇月の第三週になって、「草稿に再び着手」できるようなったのである。ヤングブルーエルは「戦闘の形勢」がイスラエル側に傾いたことを執筆作業の再開に結びつけたようだが、厳密に言ってそこに関連はない。むしろ「歴史」の勃発のせいで「仕事に戻るのにちよつと支障がある」とアーレント自身が述べている以上、彼女にとつてはまさに「歴史 history」が問題になっていたはずだろう。第四次中東戦争のみならず、中東戦争全体の「歴史」、したがって少なくともイスラエル建国以来の「歴史」、それゆえまた帝国主義と植民地主義の「歴史」である。

しかし、忖度と改竄を伴うヤングブルーエルの修正主義的記述は、そのような「歴史」を矮小化してしまう。伝

記はここで第三次中東戦争しか念頭に置いていないのだ。

アーレントは一九六七年にしたのと同じように、全国ユダヤ運動に寄付をした。また戦争がテル・アヴィヴにいる親戚の安全を脅かした場合には、すばやく財政援助ができるよう準備を整えた。

だが、緊急事態に備えてイスラエル在住の親族に対する金銭的援助の用意を整えることが、アーレントの政治性に関わる行為だとは必ずしも言えないだろう。誰もがなしうる私的行為に特定の政治信念を見出すのは難しい。そもそも、そのような「準備」が本当になされたのかどうか、確認する術もない。

にもかかわらず、これに先立つ一文、「アーレントは一九六七年にしたのと同じように、全国ユダヤ運動に寄付をした」という一文でもって、伝記はすべてのニュアンスを規定してしまう。つまり、アーレントは親イスラエ尔的だった、イスラエル在住の「親戚の安全」を懸念していた、と読者に印象づけるのである。前述のように、彼女が「寄付をした」組織は、最も過激な「ユダヤ防衛同盟」からより穏健な「全国ユダヤ運動」に訂正された。しかし、ヤング・ブルーエルは当の「寄付」の証拠をまったくあげておらず、手がかりとなりうる情報も伝記のうちには見出せない。こうして、私たちは振り出しに戻ることになる。アーレントは、一九七三年に実際に「全国ユダヤ運動に寄付をした」のだろうか？ それ以前、「一九六七年にした」というのは事実なのか？ 「一九五六年の戦争は愚かしいものだったが、一九六七年の戦争は理に適うものだと考えた」というのは、どこまでが本当なのか？ 結局のところ、パレスチナ問題について、アーレントはどのように考えていたのか？

ただ一つ明らかなのは、こうした問いに取り組みにあたって、もはやヤング・ブルーエルの伝記をあてにするこ

とはできない、ということだ。そして、この本を支配しているイデオロギーに左右されることなく、これまでとは別の仕方では考察しなければならない。依然として特別な方法は不要であるにせよ、「何か卑しいもの」を感じ取る批判意識——したがって何のものにとらわれない「内面の自由」——とその名に恥じない「学問の自由」が必要だろう。少なくとも伝記のサブタイトルとなっている「世界への愛」——ユダヤキリスト教的なそれ——を超えて、イスラエルアメリカ的ヘゲモニーの彼方で思考しなければならない。

なぜなら、今日における根本的な問題とは、シャティエーラを目にしたジュネが書いていたように、「世界の死」だからである。

- (1) Elisabeth Young-Bruhl, *Hannah Arendt: for Love of the World*, 2nd ed., New Haven, Yale University Press, 2004, p. 455-456 (「ハナ・アーレント伝」荒川幾男・原一子・本間直子・宮内寿子訳、晶文社、一九九九年、六〇五-六〇六頁)。
- (2) 以上について、より詳しくは、拙論「サイードのために——アーレントとパレスチナ問題——」、『武蔵大学人文学会雑誌』第五〇巻第一号、二〇一八年、三五-五四頁を参照。
- (3) Young-Bruhl, *op. cit.*, p. 533, n. 39 (六八七頁、注三九)。
- (4) Hannah Arendt and Mary McCarthy, *Between Friends: The Correspondence of Hannah Arendt and Mary McCarthy, 1949-1975*, edited and with an introduction by Carol Brightman, 1st ed., New York, Harcourt Brace, 1995, p. 249 (「アーレントとマッカーシー 往復書簡——知的生活のスカウトたち」佐藤佐智子訳、法政大学出版社、一九九九年、四四五頁)。
- (5) アイヒマン論争が続くなか、アーレントはサロート作品の書評を発表している。「Nathalie Sarraute, *The Golden Fruits*», in *The New York Review of Books*, March 5, 1964, p. 5-6; reprinted in Hannah Arendt, *Reflections on Literature and Culture*, edited and with an introduction by Susannah Young-Gottlieb, Stanford, Calif., Stanford University Press, 2007, p. 214-222.
- (6) Arendt and Mary McCarthy, *op. cit.*, p. 246 (四四〇頁)。
- (7) 拙論「サイードのために」前掲を参照。

- (8) Edward W. Said, *Covering Islam: How the Media and the Experts Determine How We See the Rest of the World* (1981). Rev. ed., 1st Vintage Books ed., New York, Vintage, 1997 (『イスラム報道——ニュースはどうかにみられるか』浅井信雄・佐藤成文・岡真理訳、みすず書房、増補版、二〇一八年)を参照。
- (9) Young-Bruhl, *op. cit.*, p. 533, n. 40 (六八七頁、注四〇)。
- (10) Hannah Arendt, *From an Interview*, in *The New York Review of Books*, October 26, 1978, p. 18.
- (11) Hannah Arendt, "The Last Interview: Interview by Roger Errera. Un certain regard. ORTF TV, France, October 1973" (1999), translated by Andrew Brown, in *The Last Interview and Other Conversations*, Brooklyn, N. Y., Melville House, 2013, p. 125.
- (12) ちよこ述べておけば、フランスで実際に放映されたテレビ番組「ちよ」の箇所の吹き替えは明確に derrière とすべし。
- (13) *Ibid.*, p. 125-126.
- (14) *Ibid.*, p. 128.
- (15) Hannah Arendt, *Sur l'antisémitisme*, traduit de l'anglais par Micheline Pouteu, Paris, Calmann-Lévy, coll. Diaspora, 1973.
- (16) Roger Errera, « Une analyse du totalitarisme », in *La Quinzaine littéraire*, 15 décembre 1966, p. 3-4.
- (17) アーレントからヘノーラ宛の一九七二年一月七日付の手紙を参照 (The Hannah Arendt Papers at the Library of Congress, The Digital Collection, Series: Correspondence File, 1938-1976, n.d., General, 1938-1976, n.d.—Errera, Roger—1966-1972, Image 59)。
- (18) Hannah Arendt und Gershom Scholem, *Der Briefwechsel*, herausgegeben von Marie Luise Knott, unter Mitarbeit von David Heredia, Berlin, Jüdischer Verlag, 2010, S. 439; "The Eichmann Controversy: A Letter to Gershom Scholem" (1964), in *The Jewish Writings*, edited by Jerome Kohn and Ron H. Feldman, New York, Schocken Books, 2007, p. 466 (『アイヒマン論争——ゲルシヨム・シヨレムへの書簡』矢野久美子訳、『アイヒマン論争——ユダヤ論集2』齋藤純一・山田正行・金慧・矢野久美子・大島かおり訳、みすず書房、二〇一三年、三一七頁)。
- (19) Hannah Arendt und Karl Jaspers, *Briefwechsel 1926-1969*, herausgegeben von Lotte Köhler und Hans Sauer, München, Piper, 1985 (1993), S. 234 (『アーレントとヤスパース往復書簡 一九二六—一九六九(一)』大島かおり訳、みすず書房、二〇〇四年、一三〇頁)。なお、ゲーテとブルームフェルト、そしてドイツ・ユダヤ人の歴史については、拙著『アーレント 最後の言葉』講談社選書メチエ、二〇一七年を参照。
- (20) パレスチナ人にもつわる記憶の破壊がすでに一九四八年から本格的に始まっていた事実については、Ilan Pappé, *The Ethnic Cleansing of Palestine*, Oxford, Oneworld, 2006 (『パレスチナの民族浄化——イスラエル建国の暴力』田浪亜央江・早尾貴紀訳、法政大学出版局、二〇一七年)を参照。

- (21) Young-Buehl, *op. cit.*, p. 533, n. 41 (六八七頁、注四一)。  
(22) Arendt and McCarthy, *op. cit.*, p. 350 (六一頁)。

\*引用した文献のうち邦訳があるものについては、原著と照合の上で訳文を適宜変更した。なお、本稿は二〇一七―一九年度武蔵大学総合研究プロジェクト及びJSPS科研費JP18K00111の助成を受けている。